



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

41

マルロー

征服者

沢田 閏訳

王道

川村克己訳

アルテンプルクのくるみの木

橋本一明訳

中央公論社

マルロー

訳者 沢田 潤
川村克己
橋本一明

Title: LES NOYERS DE L'ALTENBOURG

Author: ANDRE MALRAUX

Originally Copyrighted by

André Malraux

Illustrations: EDY-LEGRAND

Droits réservés A. D. A. G. P., PARIS

昭和39年11月1日初版印刷

昭和39年11月12日初版発行

価 390 円

発行者 宮本信太郎

本文整版印刷 三見印刷株式会社

扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社

口絵印刷 東京プロセス株式会社

本文用紙 三菱製紙株式会社

クロス 日本クロス工業株式会社

製函 加藤製函印刷株式会社

製本 中央整版製本部

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地

電話(561)5921(代)振替東京34

目次

征服者

王道

アルテンブルクのくるみの木

解説

年譜

3

183

335

498

514

征
服
者

わが友ルネ・ラトウーシユ*の思い出に

第一部 接近

六月二十五日

《広東^{カントン}でゼネスト指令》

きのうから、このニュース電報が赤線入りで掲示されている。水平線のかなたまで、しずまりかえったインド洋は、鏡のように、漆をかけたように——小波^{さざなみ}ひとつない。雲いっばいの空が浴室の湯気のように頭上にかぶさり、むっとする熱気でわれわれをつつむ。そして船客は、今夜受信する電報がはりだされるはずの白い掲示板から遠ざからないよう注意して、ゆっくりデッキを歩いている。始まったばかりのドラマは、連日のニュースで明らかにされる。それは現実のものとなり、いまや直接の脅威をあたえる。それは船全体の人間にとり悪い^{わる}ているのだ。これまで広東政府の敵意は、ただ言葉によってだけ表明されていた。いまや突如として、電報が行動をつたえてくる。だれにも気がかりなのは、暴動とかストとか

市街戦よりも、英国におとらず強固なものとも見える予想外の意志なのだ。もう口先ではごまかされず、英国最大の関心事たるその富と威信に打撃をあたえようという意志である。広東政府支配下の各省では、英国系の商品は、中国人経由のものでいっさいその販売が禁止され、各市場はいまやあいついで取締まりをうけている。香港の労働者による操業サボタージュ。そしてついに、このゼネストが英国領香港の商業全般に一挙に打撃をあたえ、一方、各新聞特派員は広東の軍閥係諸学校の異例の動きを打電してくるのだ。これらすべてのことが、船客たちをいやおうなく新しい様式の戦争の前にひきずえる。しかもそれは、彼らにはほとんど正体のわからぬ黒幕の支援をうけて、南シナ無政府主義勢力が企図した戦争である。その目標は、アジアにおける英国支配の象徴、武力帝国が支配下の羊の群れを監視する軍事基地——香港なのだ。

香港。その島は、地図のうえに黒く明瞭^{めいりょう}にするされ、門^{かど}のように珠江^{チウキワン}の河口をふさいでいる。この川にそつて、広東の灰色の塊^{クマ}がひろがり、漠とした場末の街をしめす点線は、英軍砲台からわずか数時間の位置である。船客たちは、毎日、なんらかの啓示を待ちうけるかのよ

* マルロー二十歳ころの親友。マルローよりやや年下であったが、二十歳に満たずして自殺した。

うに、地図のうえのその小さな黒い点をみつめている。初めのころはただそわそわと、そしていまはもう強い不安をもって、彼らの生活が賭けられているこの地——世界一富裕なこの岩山がどう防衛されるかと氣をもんでいるのだ。

もし香港が打撃を受け、おそかれ早かれ三流港に下落する——あるいはもっと単純に、その勢力が弱まるといっただけでも、中国がこれまでの白人との戦いにおいて欠けていた足がかりを発見する可能性が生まれるのである。そしてヨーロッパの支配はやがて崩壊するであろう。私と同船した綿花商人やかつら商人は、鋭くそのことを感じとっている。そしてなにより奇妙なのは、彼らの苦悩にみちた二（それにしても商社はどうなるのだろう）という）表情に、乱脈の支配していた中国自身が突如組織化され、他の追従をゆるさぬほど意志とねばりと力を体現している英国民相手にいどんだ、おそるべき闘争の反映が読みとれることである。

デッキで大騒ぎ。船客たちが走り寄り、お互いに押しあっている。電文のフリントである。

《スイス、ドイツ、チェコスロヴァキア、オーストリア》
《興味なし、中国》「これだ！
いいから、いいから——《ソビエト》どれ——だめだ、

《奉天発、張作霖は……》

これも無視。

《広東発》

一番うしろの船客たちが、掲示板に近よろうと、われわれを壁に押しつける。

《ソビエト人将校指揮下の黄埔軍官学校生徒は、学生および労働者の大デモ行進の後尾についていたが、沙面（原注、広東のヨ）に対し発砲す。橋梁守備にあたるヨーロッパ人陸戦隊は機関銃により応戦。ソビエト人将校の督励をうけた彼ら軍官学校生徒は数度にわたり橋梁攻撃を敢行、甚大な損害をこうむり撃退された。沙面のヨーロッパ人婦女子は、アメリカカ船により可能ならば香港に避難の予定。英軍部隊の出動は間近である》

ふっと沈黙がおちかかった。

船客たちは茫然自失のさまで散らばっていく。しかし右手の方で、ふたりのフランス人がいっしょになった。

「結局のところ、いつになったら各国政府は断固たる態度をとるつもりなんでしょうな。つまりその……」そしてパーの方に足をむける。ふたりの言葉じりは機械の鈍い断続音に消された。

香港まで、まだ十日はかかるだろう。

《沙面発——送電停止。各橋梁はいそぎ防備態勢にはいり、鉄条網で閉鎖された。砲艦の探照燈により照明されている》

六月二十九日 サイゴン

ひと気のない荒涼たる地方都市。長い並木道とまっすぐ延びる大通りには、巨大な熱帯樹のかげに雑草が生いしげっている……私をのせた苦力の人力車が、すいすい走りぬけていく。道のりは長い。やつのことで、りっぱな黒文字を書きだした金看板や、小さな銀行、さまざまな取次店のたち並ぶ中国人街に到着した。目の前、雑草でおおわれた広い並木道に、ちっぽけな鉄道線路がよろよろと延びている。三十七番地、三十五番地、三十三番地……ストップ！ この界限かかわ一帯の家々にそっくりの一軒の家のまえて止まる。《車室》という感じ。あやしげな取次店。門口のまわりに、あまり聞いたこともない広東の商社のプレートが幾つか打ちつけてある。屋内では、ほこりだらけのいまにもこわれそうな窓口のむこうで、中国人店員がふたり居眠りしていた。白い服を身につけた方は死人のようだし、もうひとりでつぶり太った男は、肌ぬぎの皮膚が赤土色だ。壁にかかった上海シヤンでき

の着色石版画は、額だに前髪をたらしした姿のしとやかな娘たちや、怪物や風景の絵である。三台の自動車がそこらあたりに雑然と積みかさねてある。ここはコーチシナの国民党支部長の家だ。私は広東語でたずねる。

「ご主人は在宅か？」

「まだもどってませんが、階上うへにあがって掛けててください……」

梯子はしのようなものをつたって二階にあがる。だれもいない。腰をおろして、所在ないまま私はまわりを見まわした。ヨーロッパ式の洋服だんす一本、大理石張りのルイ・フィリップ式テーブル一脚、それに黒い木製の中国式長椅子、取っ手とボルトをふんだんにくつつけたアメリカ製の豪華な肘掛椅子。頭上の額縁に、孫逸仙の大きな肖像画と、ひとまわり小さなこの家の主人の写真がかざってある。窓の外から、油のはぜる音、豆乳とう乳売りの四つ竹の音にまじって、脂肉あぶらにくの煮える強いにおいがくる……

木靴きくつの音。

主人、それからふたりの中国人、そして私の訪問の手であるフランス人ジェラルドがはいってきた。紹介があり、緑茶が供されると、彼らは中央委員会あての誓言を私に託した。《全仏領インドシナ各支部は民主主義制度に忠誠を誓う云々》とある。

ジェラルドと私は、ようやく戸外に出た。国民党からインドシナに特派されたジェラルドは、数日前ここに着いたばかりだ。口もとやあごのひげに白いもののまじる小柄の男で、どんよりして落ち着かぬ眼差と、ひとのよさそうな顔つきのおかげで、ロシア皇帝ニコライ二世にそっくりである。彼のなかにはどこか、近視の学校教師か田舎医者のようなおもむきがある。細いパイプの先に煙草をふかしながら、ひきずるような足どりで私の横を歩いている。

彼の自動車^{クルマ}が街かどで待っていた。乗りこむと、ゆるい速度で田舎道を走りぬける。風が流れるだけで、気分がよみがえる。疲れてはりつめていた筋肉がほぐれてくる……

「どんなぐあいですか？」

「新聞でご承知のとおりですな。各労働委員会のストライキ指令は完全に実施されたようです……そして英国側はまだ対抗手段を発見しておりません。義勇軍の編成なんてフザケた話ですよ。暴動にはいかもしませんが、ストには役にたちません。米の輸出禁止で香港もしばらくは食糧の心配はないでしょう。しかし、われわれの方でも香港の糧道を絶とうというつもりはなかったのです。なんのために、そんなことをする必要があるんですか？ 反革命組織のシリ押しをしている中国人富豪は、この禁

令で一発ガンと参ってますが……」

「で、きのうからの様子は？」

「異状なしです」

「コーチシナ政府が無線通信を停止したのではありませんか？」

「いや、電信局の従業員はほとんどぜんぶ、《若い安南の会》のメンバーですからね。そういうときは、知らせてくれるでしょう。中継をやめたのは香港ですよ」

一瞬、言葉がとぎれた。

「じゃあ、中国の情報網は？」

「中国側の情報網は宣伝部に指導されている、と言えはわかるでしょう。商業会議所が会頭に対英宣戦布告を要求したとか、沙面^{シャム}の英国兵が広東軍の捕虜^{ポロ}になったとか、大規模なデモを準備中の模様とか……作り話ですよ。重大かつ確実なのは、香港の英国人の手から初めてその富が脱落していく危険を彼らが目前にしておることです。

商品ポイコットは成功です。ストライキはもつとうまくいきました。ストのあとに何が来るか。残念ながら、われわれにももう見当がつかないのです……しばらくしたら、なにか情報があるにちがいません。とにかく、おとといから香港へ向けて出航した船は一隻もないのです。みんなあそこの川で停船しています……」

「じゃあ、こちらの様子はどうか？」

「まずまずというところですね。少なくとも六千ドルくらいもっていつでももらえるでしょう。もう六百ドルはくるでしょう。もっとも、当てにはならないけれども。それに私はここへ来て四日にしかならない」

「結果から判断すると、中国人は相当のぼせてるようですよな」

「そうですね、徹底してですよ。中国人の一生懸命なんて、こいつは珍しいことですがね。しかしこんどこそは、彼らも一生懸命だということは認めてやらなけりやなりません。まあ考えてごらんなさい、あとでお渡しする六千ドルだってほとんどぜんぶ貧民たちが出したものですからね。苦力とか沖仲仕ウチナカシとか職人とか……」

「へえ！ 連中も希望をもつだけの理由はありますよね。香港事件とか、沙面の……」

「そのとおりです。手出しするだけの力がなくて動きのとれない英国相手に——そう、英国相手のこうした戦争状態で彼らは夢中なんですよ。しかしこんなことはみんな、中国的とはいえないな……」

「そうでしょうか？」

ジェラルドは沈黙した。瞑想めいそうにふけているのか、入浴したようにわれわれの疲れをいやしてくれるこの涼気に吹かれているのか、彼はなかなば目を閉じたまま、車の片すみで身じろぎもしない。ほんやりした夕空におおわ

れた田んぼが、すいすい通りすぎていく。それは、木の茂みや寺院がうすい墨絵のように点在する大きな灰色の鏡のようだ。そしてきまって、電信局の高い鉄塔がそそりたっている。ジェラルドは、口をつぼめてひげを噛みながら答えた。

「香港で最近、英国側に摘発された元子社工作というのを知ってますか？」

「知りませんね。なにしろ、着いたばかりで」

「そうですね。元子社というのは秘密結社で、現在、香港と広東をむすぶ交通は小蒸気の河南号だけだ、ということに注目したんですな。この船が香港に碇泊碇泊している間、英国人土官ひとりと数人の水兵がこれを警備します。結社の幹部連中は、ずいぶん考えたもんですな、英国側が反革命軍に送る武器を積みこんだところで、船の出航を阻止すればよからうと目をつけたわけです」

「その船に、こちらの同志はひとりも乗ってなかつたんですか？」

「そうですね。それで、武器は珠江チウキウのどこかひと気のないところでハシケに移されます。スエズ運河の麻薬の密輸のやり方とそっくり同じですな。

さっきの秘密工作の話ですが、命を賭けた仕事であることはよくよく承知のうえで、六人の党員が士官と水兵を殺して船をぶんどったんですな。四時間、船のなかで

仕事したあげく、英国人義勇軍の巡回警備にひっかかりました。明け方、まさしくひきあげようというところを、

中国船の触先にある、目玉をかきいれた長さ六メートルのふたつの材木の、その片方ですよ」

「どうもよくわかりませんが……」

「この目があつてこそ、船が進める。片目だときつと座礁するだろうというわけだ」

「へええ……」

「おどろくでしょう。そりゃ、私だってね。しかし実際問題として……」

いちばんまじめな、いっとう信頼できる結社だって、チャンスがあればすぐさま、板きれ一枚の目玉の絵を取りに出かける手合いだということは、よく承知しておいでくださいよ」

それから、にやにやしている私を見ながら、

「私が問題を一般化している、誇張しているとお考えでしょうな。いや、いまにわかりますよ……この種の話は、ポロディン(ソ連の政治家。一九二三年から二七年まで広東で国民党政治顧問の地位にあった)やカリースなら無数にきかせてくれるでしょう……」

「ガリースをよくご存じですか？」

「もちろんですよ、われわれはいっしょに仕事をしてたんですからね……なんと云つたらいいかな……宣伝部長

としての彼の活躍はよくご存じでしょうな？」

「ほんの少し、ですわ」

「そうですか、つまりね……いや、どうもこいつは説明しにくい。ご承知のように、中国には行動にみちびかれるような思想がなかった。ところがいまその思想が、ちょうどフランスで平等の思想が一七八九年(フランス大革命的年)の人々の心をとらえたのとそっくり、中国をとらえているのです。まるで獲物のようにね。おそらくは、黄色人のアジア全域で同じようなことがあるのでしょう。日本でも、たまたまドイツ人講師がニーチエ(カール)の説の宣伝をはじめると、狂信的な学生たちが彼頭(カウチ)から身を投げたつて始末です。広東では、それがもつとあいまいです。もしかすると、さらに深刻たともいえる。いちばん単純な種類の個人主義さえ、思いもつかなかつたんですからね。苦力(カウチ)たちはいまや、自分たちが存在しているのだという事実をめざめつつあります。ただ単に、存在しているのだという事実からね……大衆芸術があるように、大衆のイデオロギーもあります。通俗化というのではなくて、別のなにか……ポロディンのフロバガンタは、労働者、農民にこう呼びかけたんですわ、諸君は労働者であり、農民であるゆえに、また国家の二大勢力をなすゆえに、りっぱな人物である」と。ところが、これがさっぱりでしてね。彼らの考えでは、なぐられたり餓死したりで、

なにが国家の大勢力か、というのです。彼らは、労働者であり農民だということでは侮蔑あべつされることに慣れすぎているのです。彼らにしてみれば、革命が終わって、せつかくぬけだしたいと思っているあの侮蔑の身分にもどるのがおそろしかつたんですな。ガリースのやったナショナリズムのプロバガンダの方は、そんなことはいっさい言わなかった。彼らに対し、漠然とした意味深い——そして、意表をついたやり方ではたらきかけたんです。労働者農民が自分たちの尊厳、さらに言えば重要性をも確信できる可能性を与えることで、異常な力を発揮したのです。われわれがなにを獲得したかをわかれろうと思えば、ポロをまとい麦わら帽子をかぶった十人ばかりの人力車夫が、尊敬にみちた群衆に見守られながら、ずるがしこい猫のような顔つきで、義勇兵として銃器を操練しているのをごらんになる必要があります。フランス革命やロシア革命は、各人に土地を与えたがゆえに強力なものとなったが、こんどの革命はひとりひとりの人間に生活を与えつつあるのです。これには西欧列強も身動きがとれない……憎しみ、すべてをこの憎しみで説明しようとする！　なんとという単純なことだろう！　こちらの義勇軍が熱狂的になるだけの理由はすいぶんあります。しかしそれはなによりもまず、彼らが現在ひとつの生活を望んでいるからなんで……もう、いままでの生活なんか、糞

くらえとしか考えられないんでしてね！　ポロディンは、そこどころがたぶん、まだよくわからなかったんでしよう……」

「親分ふたりは仲よくやってるんですか？」

「ポロディンとガリースのこと？」

私は初め、ジェラルドが答えたくないのだという気がした。そうじゃなかった。彼はじつと考えこんでいた。それで彼の表情が鋭くなる。夕暮れがひろがる。車のエンジンジンの響きを圧して、もう蟬の鳴き声ばかりが節音高く耳につく。田んぼがあいかわらず、道の両側を流れていく。あなたの地平線に、檳榔子がゆっくり移動していた。

「ふたりが仲よくやっているととは思わない」とジェラルドが答えた。「理解し合ってるだけのことですよ。長短あいい補うてるんですな。ポロディンは行動人で、ガリースは……」

「ガリースは？」

「行動可能な人物です。時に応じてね。いいですか、あなたは広東で二種類の人間にぶつかるでしょう。孫孫（孫逸仙）一八六六—一九二五の時代、一九二一年とか、二年にやっけてきて、運だめしをやり、あるいは命を賭けた人たち。こういう連中は冒険家と呼ぶべきでしょうな。連中にとっては、中国は、彼らが多少ともそれに巻きこまれてい

るお芝居というところだ。彼らの胸のなかで革命的感情が占める位置と云つたら、外人部隊の兵士の軍隊好きの気持と同じです。一度も社会生活を受け入れることができず、人生に対する要求が過大で、その生活に意義を与えようとしたこともあるんでしようが、いまではこうしたこと一切から目がさめて、奉仕している連中ですな。そしてもう一方は、ポロディンといっしょにやって来た職業革命家で、彼らにとっては、中国は原材料です。さきの連中は宣伝部に、あとのタイプはほとんど労組対策班か軍部にいます。ガリーヌは最初のタイプ、つまり力は弱いはずと頭のいい連中の代表で——また、それを指揮しているわけです……」

「あなたは、ポロディンが来るよりさきに広東にいらしたんですか？」

「そうです」と、彼は微笑しながら答えた。「しかし、私はあくまで客観的にお話ししているんですよ」

「で、それ以前は？」

ジェラルドは沈黙した。そんなことはおまえに関係がないと言いつもりだろうか。無理もない……いや、彼はまだ微笑している。そして、私のひざにそっと手をあてた。

「以前は私はハノイの高等中学校セの教師をしていました」

笑いがはっきり顔に浮かぶとともに、皮肉な色合いをおび、そして私のひざにのせた手に力がこもる。

「しかし、教師よりほかの事をやりたくなくなってね……」
それから、私の新たな質問を封ずるかのようになり、すぐ言葉をついだ。

「ポロディンは偉大なビジネスマンですよ。なみはずれた働き手で、勇敢で、必要なときには大胆でもあるし、非常に単純で、行動にとりつかれている……」

「偉大なるビジネスマン？」

「なにごとにつけても、これはおれに役立つだろうか、またどうすればいいだろうか？」と考へたがる人間、ポロディンがそれです。彼の世代のボルシェヴィキ（ソレ）の立場を支持した左翼多数派の称（のちソ同義共産党となる）たちにはみんな、アナーキスト（ソ）に対する闘争のなごりがあります。つまり、彼らの考へでは、なによりもまず現実とか権力行使の諸困難とかいう問題に頭をつかう人間となる必要があるんですよ。それに、ポロディンの胸のうちには、若いユダヤの青年として生きた時代の思い出があります。周囲から軽蔑の目でみられ、シベリア行きを覚悟しながらも、ラトヴィアの小さな都会でマルクスを読みふけていたころのね……」

蟬せみ、蟬しぐれ。

「さきほどちょっとお話しになっていた情報は、いつわ

かるんでしょう？」

「間もなくです。われわれは、シヨロンの国民党支部長のところへ晩飯を食いに行くところですね。この男は阿片窟と料理屋兼営のあるじです。ほら、あそこにあるような」

なるほどわれわれは、大きな看板文字と鏡にかざられた料理屋の家並みを通りすぎつつある。生命あるものは、もはや、光と騒音ばかりの雰囲気である。おびたらしい反射鏡やガラスや電気の笠や電球。そして、麻雀の音、蓄音機、歌い女の金切り声、鋭い横笛のひびき、打楽器、ドラ……

光はますますめまぐるしい。運転手は車の速度をおとして、いらいらしながら、ひっきりなしに警笛を鳴らす。われわれの国の大通りより、もっとびっしり混雑した白一色の人ごみのなかを通りぬけようというのだ。労働者をはじめ、ありとあらゆる職業の貧しい中国人たちが、お菓子や果物をほおぼりながらぞろぞろ歩いている。安南人の運転手がどなりちらして、車が警笛とブレーキの音をひびかせても、ただちよっと道をよけるだけである。ここはもう、フランスとはまるきり違う。

車が一軒の料理屋兼阿片窟のまえに止まった。これまで目にしたような粗末な鉄の露台はついていないが、植民地風の感じが少なく、こじんまりした私邸のおもむき

がある。例によって、金地に黒い二字の看板をかかげた門口は、右も左も奥の方も、そして階段の垂直部分さえ鏡ばかりだ。勘定場で、はだかの上半身をのぞかせたでっぷり太った中国人が、そろばんをおいている。男のかげに見ずかさされる奥行きのでかい部屋では、薄暗がりのなかで、真珠色の小えびを盛った大皿と、山のように積みあげた真つ赤な色のそのかるい食べがらをかこんで、いまでもオレンジ色の人影がその手をいそがしく交錯させている。

二階にあがると、ブルドッグづらをした四十がらみの中国人がわれわれを迎え入れ（紹介があつて）、すぐに私室に通してくれた。その部屋で、彼と同じ三人の中国人がわれわれを待っていた。しみひとつない純白の詰襟服。黒い木製の長椅子に、植民地用のヘルメット帽がある。また、紹介。（もちろん、名前はひとつだつて聞きとれない。）テーブルクロスを敷いてない小さなテーブルの上に、料理の皿や、調味料の入った小型の容器がぎっしりならんでいた。柳づくりの肘掛椅子数脚。天井につるした無数の電燈の光が、騒々しい夜の闇のなかに流れだしている。ざわざわと部屋に充滿する物音を圧するように、たえず、爆竹の音、麻雀パイをかきまぜる音、ドラのひびき、そして時に胡弓のしのび音がとびこんでくるのだ。扇風機が熱気のかたまりをなんとか室外には

らしいのけようとしている。

この家のあるじであり通訳もしてくれるブルドッグ男が、強いなまりのある低い声で私に言った。

「フランス病院の院長さんが、わたしとここで夕食をありがちしてね。今週のことですが……」

それがずいぶん自慢の様子だ。が、仲間のいちばん年長の男にその言葉をさえぎられてしまった。

「この方たちに伝えてもらいたいんだが……」

ジェラルドはすぐに、私が広東語を解することを彼らに言った。一同の親近感はいっそういちじるしいものとなった。座談がはじまる。《人民の権利》とかなんとかをもちだしてくる、デモクラシー談義。私が強く感じたのは、これらの人々を支える唯一のちからが漠然としたひとつの感情であり、身にうけた不幸だけは彼らも間違はなく自覚しているということだった。私は国民公会コングミングン（一九二五年のフランス革命議会）当時の地方の政治団体を連想した。（もつともこれらの中国人たちはたいへん礼儀正しい。

それがまた、鼻汁をすすりあげる癖とずいぶん奇妙なとりあわせだけれども。）彼らはみんな、言葉のうえでではなくという確信をもっていることだろう！そして彼らは、せつせとドルを送りこんでいる当の相手の各種委員会の明快でねばり強い行動のまえには、まったく無力なものであるにちがいない！……

きよう、彼らが手にした雑多な情報は次のとおりだ。

《イギリス人は、中国内陸全都市より、国際租界に向かい緊急避難中》

《苦力組合連合は、香港のスト参加者援助のため、各組合員が以後毎日五セントずつカンパすることを決議した》

《上海ならびに北京において大々のデモが準備されつつある。外国帝国主義者によって加えられた不当なる暴力行為を胆に銘じ、中国の自由確立を期するため》

《華南各省に膨大な兵役志願者あり》

《広東軍はソビエトから多大の軍需品の供与を受けた》

それから、次のニュースはちゃんときと太字で印刷してある。

《香港における送電停止は時間の問題》

《昨日中のテロ行為五件。警視總監が重傷を受ける》

《香港市内は断水の危機に瀕している模様》

最後は、国内政治に関するニュースだが、そのほとんどに程俗とかいう人物が関係している。

夕食がすむと、ジェラルドと私は、連中が白い袖をひるがえしてふかぶかとお辞儀するなかを、階下におりた。しばらく歩くことにきめる。風がさわやかだ。ほど遠からぬ川で、時おり船が鈍い汽笛をひびかせると、それが